

支えがあつて

金屋中・3 林 詩乃

「あなたがやらなくて誰がやるの？」

この言葉に背中を押してもらい、一年の後期に生徒会選挙を経験した。緊張するのは嫌いだが、この言葉が私に「挑戦したい」と思わせ、立候補した。演説会はかなり緊張したが楽しく話せた。そして私は当選し、生徒会役員としてふさわしい行動を心掛けた。前の自分より自信をもつことができた。

任期が終わるころ、一年前期生徒会役員立候補者を募集していた。私は、

「やりたい！」

と思つていた。でも、周りの人から、

「連続でやるなんて……」

と思われるのが怖くて立候補できなかった。自分の本心を無視し、怖いことから逃げた。私と一緒に後期生徒会をやっていた子は立候補し、生徒会としてがんばっていた。その子は前回の演説の時に、私が、

「緊張するなあ。失敗してみんなから冷たい目で見られたらどうしよう。」

と言つた。するとその子は言つた。

「失敗しても、やりたいことをがんばっている自分をほめよう。」

これを聞いて、その時の演説は堂々と話せた。

半年後、二年後期生徒会役員立候補者を募集していた。二年後期から立候補者の中で会長にふさわしい人を一人選ぶ。一番票の多かった人が会長になる。私は、

「会長になりたい！」

と思ひ、立候補した。緊張したけど自分らしく、楽しく話せた。そして私は会長になれた。その後は一生懸命、やりたいことをやりきることができた。

また任期が終わるころ、新三年生の前期生徒会役員立候補者を募集していた。私の本心として、

「もう一回、会長をやりたい。」

と思つていた。でも怖い。周りの人から、

「あの人、会長をやつてて自信満々に立候補したくせに落選つて……」

と思われるのが怖い。失敗したとしても、やりたいことは堂々とやったほうがよい。そんなことはもうわかつていた。でも自分のプライドから、次落ちたらもう立ち直れなくなると思ひ、また逃げた。心の中ではずっと言い訳をしていた。

「逃げるのも大切だ。」

と。心の中にあるわだかまりが消えないまま過ごしていた。

「立候補用紙はもう出したのか？」

ある日、生徒会担当の先生が聞いてきた。出したけれど出せないの。

心の中でつぶやいた。私は、

「やりたいけど、落ちるの怖いです。」

と言つた。やる前から落ちる気でマイナス発言しかできなくて情けないなと言ひながら思つた。そしたら先生は、

「大丈夫だよ。詩乃ならできるよ。」

と言つてくれた。嬉しかったし、期待に応えたかった。そして心の底にいる自分が、

「やりたいよ。もう一回なりたいよ。」

と叫んでいる。私は立候補用紙をもらった。もう見慣れている紙だ。ただの紙だが私にとっては希望であり不安でもあった。

責任者は今までの選挙を支えてくれた大切な友達に頼んだ。

「がんばろう！次も会長を目指そうね。」

と笑顔で責任者の欄に名前を書いってくれた。推薦者の欄に名前を書いてもらうとき、

「がんばってね。応援するよ。」

と励ましてくれた。その紙は希望や不安、そのうえいろんな人からの支えもつまっていた。

数日後、正式に立候補者が全校に公表された。私の学年は一人落選する。学校を一人で歩いているとき、何回か耳にした。それは、「詩乃ってまた立候補したんでしょ。」

「どうせ次の会長も詩乃やん。」

と。何となく想像していた。でも実際聞くとダメージは大きく、学校でさえ怖くなった。悪いように思っているとは限らないけど、どうしても悪く考えてしまう。好きなこともつまらなく感じる。何もやりたくない、考えたくない。きつと誰かは、

「そんなふうにいるならやらなければよい。」

と思うだろう。違う、そういうことじゃない。私はもう一回会長をやりたいという本当の気持ちから目を背けたくない。やらなくて後悔はもうしたくない。でも失敗したら立ち直れなくなるだろう。周りの目が怖い。そんな気持ちとずっと戦っていた。上手に伝えられないが、誰でもよいから私の気持ちをわかってほしかった。気づいてほしかった。共感してほしかった。そして周りから余裕と思われるのがつらかった。でも成し遂げたかった。

選挙当日、後輩がわざわざ時間を早めて一緒に登校してくれた。いつもは一人だから心強く感じた。責任者の友達も毎時間の休み時間にと応援してくれた。その日は担任の先生がいなかったが、別の先生が手紙をくれた。担任の先生からだ。そこには、

「スマイル、スマイル。いつもどおり詩乃らしさをかましてね！」

と書かれていた。緊張で押しつぶされかけていた私の心は、その優しさが詰まった文に思わず泣きそうになった。その手紙を胸ポケット

トにしまい、

「大丈夫。がんばれる。できる。」

ずつと心の中でつぶやいていた。

あつという間に移動の時間。体育館に到着すると、膝ががくがくして筋肉が消えたかのように力が入らなかった。心臓が体の中で震えすぎて、破裂しそうだ。緊張、いやそれ以上の何かのせいで視界がぼやけてくる。大声で泣き叫びたかった。この時にくらべると今までのいろんな大会、テストはアリみたいになんとも感じない。何とか落ち着かせようと今まで支えてくれた人を思い浮かべる。自分を励ます。やりたいことは堂々とやる。私には応援してくれる友達がいる。期待してくださる先生がいる。もうすぐ自分の番だ。

「大丈夫。できるよ。」

胸ポケットに手を当てて自分の番を待った。

「二年二組、林詩乃さん、お願いします。」

「はいっ！」

静かな体育館に響き渡る私の声。私は話し始めた。やっぱ楽しい。人前で話すの、緊張するけど楽しい。演説が終わり、拍手が響く。できたよ。友達や先生が応援してくれることが支えとなってくれたよ。本当にありがとう。

結果発表の時。放送のチャイムが鳴った。

「会長、二年二」

心の中で思いきり叫んだ。会長に当選だ。前とは違う涙が溢れそうになる。逃げずにがんばれたことへの涙。目を背けなくてよかった。本当の気持ちを貫き通せてよかった。自分の中の恐怖に勝てたのは支えてくれた人たちのおかげ。一人じゃ無理だけど支えてくれたから乗り越えられたよ。その時の私の心は、喜びやがんばりぬけたことへの自信、そして、支えてくれた人への感謝で満たされた。一年生の時のあの言葉がなかったら、私は生徒会という貴重な経験ができていたのだろうか。生徒会の先生から背中を押されてなかったら、

きつとやりたいという本心から目を背けていただろう。友達から先生からの応援、励ましがなかったら、私は選挙で本来の力を発揮できなかったのだろうか。周りの支えとは自分の中ですごく影響が大きく偉大なものなのだろうと強く感じた。そして今、自分が元気に学校に行け、やりたいことをやれていることは支えてくれたからこそだと思ふ。私自身、支えてもらったからこそ今の自分があるので、私も周りを支える側になりたいと思った。そしてまた、支えてもらったことでできた経験、自信をこれからの自分の糧としてもっと成長し、「支えてくれてありがとう。」

というこの言葉を口だけじゃなく、姿勢で伝えていくぞと心の中で強く、強く思った。